

親子と地域を結ぶ架け橋

～ J A 北つくば・子育て支援センター「はだしっ子」の取り組み～

調査研究部 福田 いずみ

はじめに

少子化社会の到来が認識された1990年の「1.57ショック」以来、政府によって「エンゼルプラン」をはじめとする支援策が次々と打ち出されてきた。

少子化・子育て支援対策の流れ

1994年12月	エンゼルプラン 策定《1995年度～1999年度》
1999年12月	少子化対策推進基本方針、新エンゼルプラン 策定《2000年度～2004年度》
2001年1月	待機児童ゼロ作戦
2002年9月	少子化対策待機児童ゼロ作戦プラスワン 提言（厚生労働省）
2003年7月	次世代育成支援対策推進法 成立 少子化社会対策基本法 成立
2004年6月 12月	少子化社会対策大綱（閣議決定） 子ども・子育て応援プラン（少子化社会対策会議決定） 策定《2005年度～2009年度》
2005年4月	次世代育成支援行動計画（2005年度～2014年度の10年計画）
2006年6月	新しい少子化対策について（少子化社会対策会議決定）
2007年12月	「子どもと家族を応援する日本重点」戦略 仕事と生活の調和（ワーク・ライフ・バランス）憲章 仕事と生活の調和推進のための行動指針
2008年2月 7月	新待機児童ゼロ作戦 次世代育成支援対策推進法及び児童福祉法 改正 社会保障の機能強化のための緊急対策～5つの安心プラン
2010年4月	次世代育成支援後期行動計画（2010年度～2014年度）

『子ども計画ハンドブック』より作成

本稿で紹介する子育て支援、「子育てひろば」の活動は、1990年代後半から都市部を中心に核家族などで孤立しがちな親子や子育て経験者たちが自由に集い、お互いを支えあうような居場所づくりが原型となっている。草の根的な市民活動として始まったこの活動

は、2002年に「つどいの広場事業」として制度化され、2004年に政府が発表した『子ども子育て応援プラン』によって子育て支援拠点「ひろば型」として位置づけられた。そして2009年4月の児童福祉法改正によって社会福祉法上の「第2種社会福祉事業」となった。厚労省の調べによる「ひろば」の数は、2009年度で1,527ヶ所となっている（資料(1)（P26））。

J Aグループでも、かつては子育てしやすいといわれていた農村部も、近年の過疎化や少子化の影響を受け、近隣の子育て家庭の減少による子育ての孤立化や、世代間による子育ての伝承が希薄化しつつあるという実態に鑑み、全中が中心となって地域の親子の交流の場となる「子育てひろば」の活動を推進している。

現在、「子育てひろば」の活動は、J Aの行う子育て支援のひとつとして数J Aで取り組まれている。いずれも地域コミュニティ活性化と次世代のサポートを目的とし、地域の農産物を利用したおやつ作りや、収穫体験などを取り入れたJ Aらしい特色のある取り組みとなっている。

本稿では、毎年少しずつ広がりを見せているJ Aの「子育てひろば」の活動の中から、自治体に先駆けて管内の茨城県桜川市に独自の子育て支援センターを設立し、地域の中で積極的に子育て支援活動を行っているJ A北つくばの取り組みについて紹介していきたい。

1. JA北つくばの概要

北つくば農業協同組合は、平成5年（1993年）旧下館市、結城市、旧明野町、旧協和町、旧関城町、旧真壁町、旧大和村の2市4町1村の各JAが合併し誕生した。平成18年8月には旧岩瀬町農協も加わり、筑西市、結城市、桜川市の3市にまたがった広域農業協同組合である。

JA管内では、穀物（米・コシヒカリ、小麦、大豆、常陸秋そば）をはじめ、青果（こだま西瓜、幸水・豊水梨、トマト、キュウリ、白菜、レタス、イチゴ、花卉類）、畜産（豚、牛）と100種類を超える農畜産物が産出されている。



JA北つくば 概要

設立	平成5年2月
本店所在地	茨城県筑西市岡芹2222
組合員数	24,627人
総資産	1,928億円98百万円
役員数	39人
職員数	612人（臨時・パート含む）
支店・営農センター数	13

『2010 JA北つくばの現況』より作成

2. JA北つくば子育て支援センター「はだしっ子」

「はだしっ子」には、子どもたちが裸足で野山を駆け巡り自然を足から感じてほしいという願いが込められている。



JA北つくば「はだしっ子」概要

開設日	平成20年4月
場所	旧JA支所を改装
対象者	管内在住の0歳～6歳の児童と保護者
開催日	企画あそび(月・1回) 自由あそび(週・2回)火曜AM・木曜AM、PM
参加費	企画あそび 500円程度(材料費) 自由あそび 無料
運営費	年間160万円(保育士人件費等)
利用者数	1回平均15組(約35名)

JA北つくば資料より作成

(1) 設立までの道のり

この事業は、JA北つくばが組織の活性化を図ろうと立ち上げたいくつかの研究会の一つ「子育て支援研究会」で調査研究をすすめた結果、実現したものである。

「はだしっ子」設立経過

平成19年	6月22日	子育て支援プロジェクトの創設
	8月22日	第1回子育て支援研究会開催
	10月3日	第2回 "
	10月18日	筑西市(下館)子育て支援センター視察
	10月24日	結城市子育て支援センター視察
	11月6日	第3回子育て支援研究会開催
	11月29日	第4回 "
	12月5日	第5回 "
	12月10日	常勤役員に研究会の経過報告 (事業概要・事業計画案を提案)
	12月17日	子育て支援事業の概要および事業計画案を経営会議に附議
	12月19日	第6回子育て研究会開催
	12月26日	定例理事会に事業計画案を附議
平成20年	1月21日	第7回子育て支援研究会開催
	1月30日～	全中主催の子育て支援相談員養成研修に参加
	2月1日	(研究員3名の職員)
	2月8日	新聞各社に事業趣旨説明ならびに広報誌等において利用者募集を開始
	2月2日	第8回子育て支援研究会開催
	2月23日～	子育て支援遊具の寄贈受付
	2月26日	保育士採用面談
	2月28日	定例理事会にて子育て支援センター改修工事業者を選考
	3月3日～	子育て支援についての実技研修を実施
	3月6日	子育て支援職員7名保育士2名
	3月10日	第9回子育て支援研究会開催
	4月2日	改修工事終了
	4月3日	子育て遊具の搬入
	4月5日	第10回子育て支援研究会開催
4月10日	子育て支援センター開所式	

資料『JA北つくば 子育て支援センター概略』

(2) 設置の趣旨・目的

JA北つくばでは、子育て支援センター「はだしっ子」設置の趣旨・目的を以下のように定めている。

「近年、少子化・核家族化の進展などの社会的な変化によって子育てが困難になっています。両親が育児に夢を持ち、安心して生み育てられるように、当JAでは、親子が集い、遊びを通して交流を深め、母親の育児不安の解消と元気な子どもの成長を目的とします。」

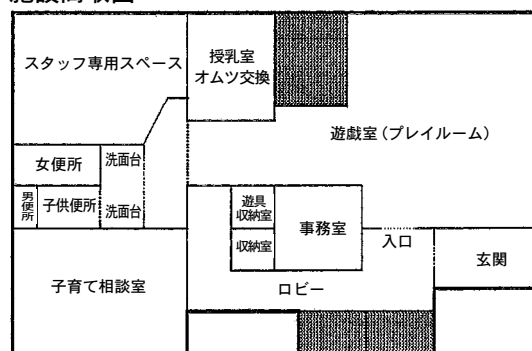
(JA北つくば・子育て支援センター資料より抜粋)

(3) 設備・環境

平成20年4月にスタートした「はだしっ子」の活動には、合併による遊休施設(旧JA支所)を子育て支援センター用にリフォームした施設が使用されている。

十分な採光を確保した広々とした館内は、0歳から就学前までの乳幼児が安心して過ごせるように子ども用のトイレや授乳室などの環境が整えられ、親子が好きな玩具で遊んだり、ゆっくりと過ごせるように工夫されている。

施設間取図



(4) 活動内容

J A北つくばの担当者や、スタッフの保育士等で考えられた活動メニューには、通常の「自由あそび」と月1回の「企画あそび」が用意されている。

季節の行事を楽しんだり、自然の中で収穫のよろこびを感じてもらいたいとの願いから、「ブルーベリー摘み」や「芋ほり」などのJ Aらしいメニューを取り入れている。

「はだしっ子」の案内チラシ
 ・その他にJ Aのホームページ等でも案内している

平成22年度 「企画あそび」 実施内容

実施日	テーマ	内容
H22.2.17 (木)	かわいいおひな様を作ってお部屋にかざろう！！	おひな様作り
H22.3.16 (火)	今日はお楽しみ会 わくわくしちゃうね！！	お面作り、プチおやつ 手遊び・体操
H22.4.23 (金)	親子いっしょに風船あそび&じゃがいも植え	バルーンアートショー じゃがいも植え
H22.5.26 (水)	小麦粉ねんどをつかってあそぼう！	小麦粉ねんどあそび
H22.6.28 (月)	短冊に願いを込めてたなばたづくり	七夕作り
H22.7.26 (月)	親子で楽しもう「甘くて美味しいブルーベリー摘み！！」	ブルーベリー摘み体験 ジャム作り、試食
H22.8.9 (月)	おみこし「ワッショイ ワッショイ」	おみこし作り こま作り、ヨーヨー釣り
H22.9.24 (金)	ママといっしょ…1, 2, 3ミニ運動会	室内でできるミニ競技
H22.10.15 (金)	ヨイショ・ヨイショ おいもほり	さつまいも掘り体験 試食
H22.11.26 (金)	赤や黄色の落ち葉と木の実で楽しむあそびがいっぱい！！	どんぐりを使った楽器作り みの虫作り 落ち葉のプール遊び

「はだしっ子」の開催日は、子育て支援センター長（J A職員）と保育士2名の計3名が常駐スタッフで対応し、企画遊びなどのイベントがある日は、必要に応じてJ Aの職員が加わる。

開所した年は、市内で唯一の子育て支援センターということもあり、口コミなどで利用者数が増え一時期は30組以上に達した。予想を超えた住民の反応に当初は戸惑った時期もあったが、一年後に行政による支援センターができたことで分散化され、今は一日に15組ほどの利用となっている。



自由遊びの日の様子

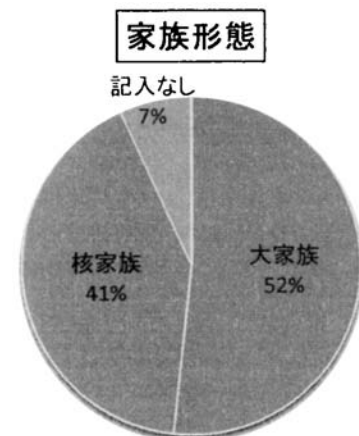
豊かな自然環境や、子育て支援センターの広い敷地を活かし、ブルーベリー摘みやプールでの水遊びなど、のびのびとした活動を行っている。



ブルーベリー摘み



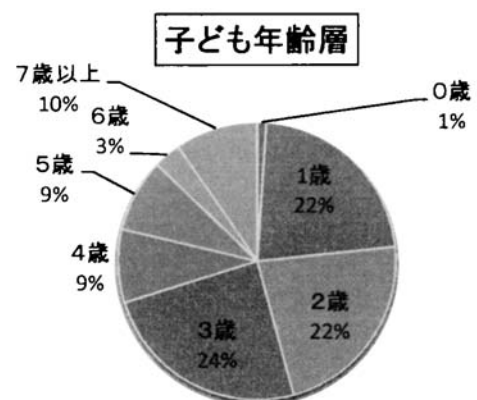
水遊び



(5) 利用者の構成

JA北つくばの実施した利用者アンケートの結果による「はだしっ子」の利用者の様子は以下のとおりとなっている。

「はだしっ子」の利用者は、大家族が比較的多く、子どもは1歳～3歳までが中心である。また、「はだしっ子」を知ったきっかけの多くは、友人や知人からの口コミであることがわかる。

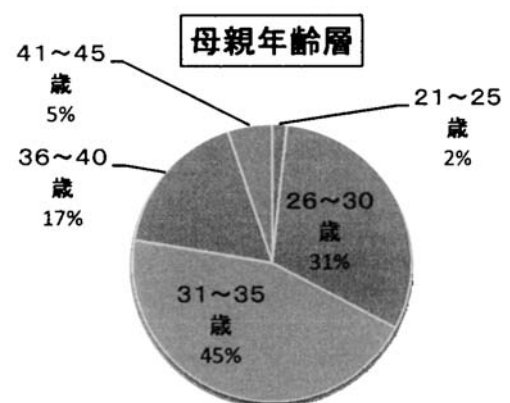


「はだしっ子」を知ったきっかけ

地区	人数
JA広報誌(すてっぷ)	10
JA各支店・職員	4
知人・友人	46
家族	4
その他	6

(その他の意見)

- ・市役所に問い合わせをした
- ・新聞



JA北つくば資料より抜粋

はだしっ子ハロウィン

「はだしっ子」が発足して初めての大きなイベント「はだしっ子ハロウィン」が開催された。



イベント案内チラシ

イベントのタイトルが「はだしっ子ハロウィン」に決まり、ハロウィンの仮装コンテストの出場者（0歳～6歳）を募ったところ、70名を超えるエントリーがあり、予想以上の反響に急遽50名の職員を動員して本店総務部を中心に準備を行った。

イベント当日、JA北つくばの子育て支援センターの庭にはハロウィンの装飾を施したステージが設置され、メインイベントの仮装コンテストでは、ハロウィンの仮装をした子どもたちがエントリーナンバー順に次々と呼ばれ、緊張の面持ちでポーズを決めるかわいい姿に観客席から笑いと拍手がわき、大いに盛り上がった。

その傍らでは、JA女性部の協力による模擬店（チョコバナナ、焼そば、ポップコーン、豚汁、餅など）や、ゲームコーナーなどが設置され、お昼時には餅つきの実演とともに「つきたての餅」や、おにぎりがふるまわれた。

当日は日曜日ということもあり、日ごろ「はだしっ子」に来る機会のない父親の姿や、祖父母とともに三世帯で楽しむ家族、そして地域の人々も加わり大盛況であった。



仮装コンテスト

3. ヒアリングによる調査結果

「はだしっ子」の取り組みについて、JA北つくばの代表理事組合長と子育て支援センター長にヒアリングを行うとともに、「はだしっ子」と「はだしっ子ハロウィン」の開催時に集まった利用者・参加者から聞き取った主な内容を以下(1)～(4)にまとめた。

ここでは、ヒアリングを通して運営者と利用者の両面から「はだしっ子」の活動について検討してみたい。

なお、(5)には、基礎自治体である桜川市において、「はだしっ子」の活動を行政の立場からどう捉えているのかについて、市役所の児童福祉課からヒアリングした内容も付け加えている。

(1) JA北つくば代表理事組合長・加倉井氏 子育て支援に取り組む理由について

- ・今、日本が抱えている大きな問題である少子化の対策を考えるのは当然。
- ・管内の将来の人口推定データからこの地域の少子化が顕著であるという事実を目の当りにし、子育て支援が緊急に必要であると判断した。
- ・行政からの補助金を受けながらやろうとすると申請等に時間がかかり、すぐに実行できないので補助金を受けずに自立的に実行することを決断。
- ・財政的に可能であれば税金を当てにせず、地域貢献をするのは当たり前。社会使命である。
- ・この事業を継続させていくためにも経営には全力を注いでいる。

(2) JA北つくば子育て支援センター長・外山氏

（開所当時から現在までの「はだしっ子」の状況について）

- ・最初の年、利用者が急増した時期は、人が集まりすぎて「はだしっ子」を利用してくれている親子が本当に楽しんで、満足してくれているのか心配した時期もあったが、次の年に行政の子育て支援センターができて利用者が分散し、今はゆったりと利用してもらえてよかったと思っている。
- ・JAの特色を出すための工夫として「ジャガイモの栽培」や「ブルーベリー摘み」などの「企画あそび」を取り入れている。
- ・今後も色々な方法でJAらしい特色を出していきたい。
- ・JA北つくばの女性部で食育に関する講演会を予定しているので「はだしっ子」の利用者にも聴講させてあげたいと思っている。
- ・利用者がよろこんでくれるのが一番うれしい。これからも継続・発展させていきたい。

(3) 「はだしっ子」利用者の声

- ・スタッフがやさしいので利用しやすい。あたたかい雰囲気がある。
- ・保健センターなどで友達になった親子の再会の場として利用している。
- ・JAの子育て支援センターということで、義父母からの信頼もあって出かけやすい。
- ・同居している義母が組合員なので、家に届けられるJAの機関紙で「はだしっ子」の取り組みを知り、家族にも行くことをすすめられた。
- ・広くてきれいなので親子ともに「はだしっ子」のファンである。
- ・「ブルーベリー摘み」や「芋ほり」などのJAらしい「企画あそび」に魅力を感じている。
- ・玩具がたくさんあるので子どもがよろこんでいる。
- ・もっと開催日を増やしてほしい。

(4) 「はだしっ子ハロウィン」参加者の声

- ・「はだしっ子」を以前から利用したいと思っていたが、中に入る勇気がなくて躊躇していた。イベントをきっかけに参加できてうれしかった。
- ・「はだしっ子」のことは全く知らなかったが、このイベントで「はだしっ子」を知った。ぜひ次回から利用したい。
- ・いつも妻と子どもが「はだしっ子」を利用させてもらっている。企業に勤めている者からすると、地域の子どものためにJAが無料でこういう活動をしてあげていることはとても大変なことだろうと思う。と同時に、とてもありがたいと思っている。
- ・「はだしっ子」に行った日は、妻子ともに1日中家にいた日と比べて楽しそうにしている。JAは自分には全く関係の無い組織だと思っていたが、妻子が「はだしっ子」の活動に参加するようになってからは、とても身近な存在に感じるようになった。

(5) 行政側から見た「はだしっ子」(桜川市児童福祉課)

- ・行政よりも1年早く子育て支援センターを開設していたのは知っている。行政からの補助を受けずに行っているため、運営内容に関して詳しく把握していないが、JAがやっていることだから信頼している。
- ・週2回開催していることは承知していた。「旧JAの建物から楽しそうな子どもたちの声が聞こえてくる。何をやっているのか知りたい」という市民からの照会に答えられなかったため、最近JAにお願いして子育て支援課の窓口にも「はだしっ子」のチラシを置いてもらうようにしている。

- ・行政としては、今後子育て支援センターを増やしていきたいと考えているが、財源に限りがあるのでJAの遊休施設を利用した活動に魅力を感じている。可能であれば今後は連携を図っていきたい。

4. ヒアリングから見えてきたもの

「はだしっ子」の取り組みは、加倉井組合長の少子化に対する高い意識と、地域の将来を見据えた冷静な経営判断、そして「子育て支援研究会」による十分な検討のもとで、実現した。

加倉井組合長は、元町長という経験から、行政の補助金を受けるとなると申請等に時間がかかることを熟知しており、JA独自で運営できるのであれば、税金をあてにしないで組合員や地域に貢献していきたいと考えている。一方でこの事業を続けていくためにも経営基盤が重要であるとして経営に対する目は厳しい。

また、「はだしっ子」の発足時から子育て支援センター長を務めている外山氏は、常に利用者の側に立って考える姿勢を持ち続け、できるだけ利用者ニーズに応えようと、アンケートなどで利用者の意見を聞く努力も怠らない。

特に、活動の中にJAらしさを出すことを強く意識しており、「ジャガイモ」や「ブルーベリー」の収穫などの「企画あそび」を通じて、楽しみながら農業への関心や理解を深めてもらいたいと考えている。

このようにして運営されている「はだしっ子」に対する利用者たちの反応だが、JAの特色を出した「企画あそび」をはじめ、行政に比べて広くてきれいな設備や、遊具の豊かさが好評であり、スタッフの温かな対応にも評価の声が上がっている。

そして、「JAがやっているから安心して

家族が送り出してくれる」という利用者の言葉から、農村地域の大家族の中で暮らす若い母親の「外出しにくい」など気兼ねの多い状況が垣間見られ、JAがこのような活動を行う意義を感じた。今後も、子育て支援センターというものが無かった時代に子育てをしてきた世代からこの活動を理解してもらうために、広報誌等で「はだしっ子」の活動を紹介していくことが大切ではないか。

開催日を増やしてほしいという要望については、毎日開催している行政の支援センターと比較して、週2回の開催を少ないと感じている利用者もいるようである。

イベントに参加していた若い父親たちからは、妻子が参加している「はだしっ子」の活動を通してJAに対する印象が変わってきたことを知ることができ、この活動がきっかけとなって、JAのイメージアップや事業への理解につながっていることが確認できた。

最後に、自治体との関わりについていえば、資料(2) (P 26) の表で明らかのように、子育て支援事業の運営や情報発信は市町村が中心に展開されており、親たちは自治体の窓口を中心に子育てに関する情報を収集することが多い。

それに対し「はだしっ子」の活動は、JAで自立的に運営されており、行政の情報ツールとは別のところ(JAの広報誌等)で情報を発信してきた経過があるため、「はだしっ子」のことを知らない住民も多いようである。

JAの価値ある活動を広く知ってもらうために、今後も引き続き「チラシ」を置くなどして「はだしっ子」の情報を発信していくことが必要であろう。

おわりに

今回、調査を行った「はだしっ子」の取り組みは、設置の趣旨・目的を明確にし、環境・設備を整え、専門家（保育士）を常駐させるなど、ハード面とソフト面の双方が整ったしっかりとした取り組みとなっている。そして活動内容には行政の取り組みでは出せないJAらしさがよく現れており、生協などで活発に展開されている「ひろば」の取り組みに引けを取らない内容となっている。また、この取り組みは、ヒアリングの中で明らかになったように、子育て中の親子に交流の場などを提供し、地域の子育ての利便性を高めているという直接的価値と、そこに集う若い親たちの生活実態やニーズを知ることができるとともに、JAのイメージアップにもつながっているという間接的価値を持っている。

JA北つくばの取り組みは、第25回のJA大会で決議された「組合員・地域住民の生活の総合的な支援」に結びつく活動でもある。合併による遊休施設などを地域住民の次世代支援に活用することで、これまではJAと関わりを持つ機会があまりなかった小さな子どもを持つ若い親たちとのつながりが生まれ、さらには地域と親子をつなぐ架け橋となる可能性もある。ちなみに、今回のヒアリング調査に同行していただいた東洋大学社会学部の森田明美教授（児童福祉学が専門で、いくつもの自治体の子育て支援事業へのアドバイス経験を持つ）も、「はだしっ子」の取り組みを評価している（右参照）。

JAの子育て支援には、農繁期託児所の開設に始まり、地域や行政の要望などで農協立の常設保育所や幼稚園を設立するなどし、時代のニーズに応えながら組合員や地域の親子の問題に寄り添い「農村の児童福祉」に関与してきた長い歴史がある。

現在の取り組みとしては、少子化をはじめ

核家族や共働き家庭の増加という時代背景を反映した「子育てひろば」の活動や、「学童保育」の運営があげられる。また最近では、行政と連携して「子育て支援センター」の運営を行うなどの新しい展開も見られる。

JAの存在価値を問う声が上がる中で、地域に根ざした組織であるJAが、これからもこのような活動を通して地域の中でコミュニティの支えとなっていくことは、組織の存続にも関係する重要な課題といえるのではないか。

JA北つくばの子育て支援に関する取り組みは、「はだしっ子」の他にも「JA北つくば学童野球大会」や「農業体験事業」など幅広い。このようなJAの活動が今後、組合員や地域住民からの信頼へとつながっていくことを期待したい。

専門家から見た「はだしっ子」

東洋大学社会学部 森田明美教授（児童福祉）

JA北つくばの子育て支援事業は、少子化が顕著であるこの地域にとって緊急に必要であるとの判断から行政の支援を受けることなく、JA単独の事業として決断され実施されたことは類稀な見識と感動した。

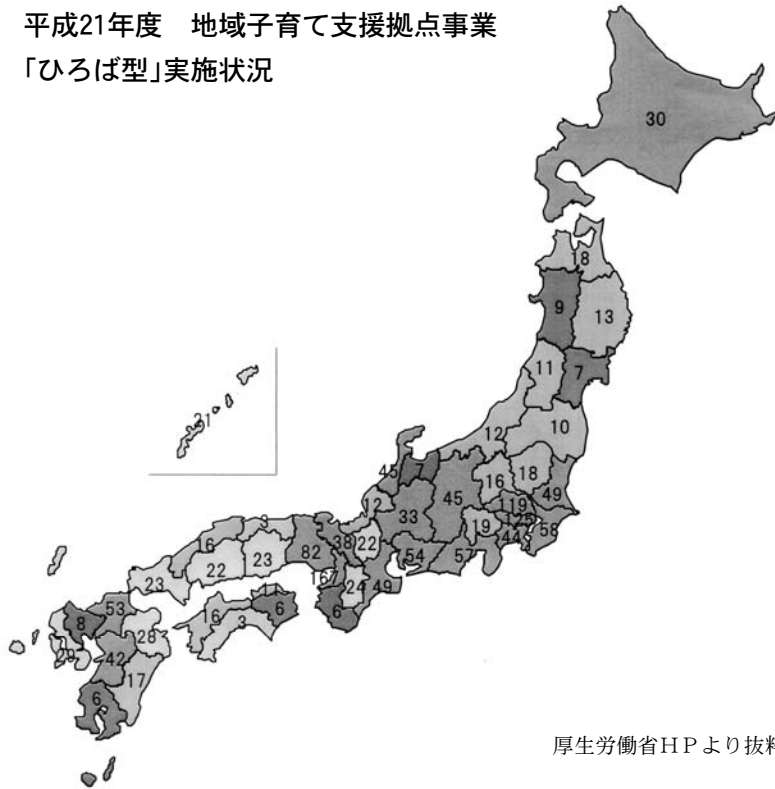
子育て支援に対する親のニーズは様々であり、深刻な問題を抱えた親子は結果的に行政へつないでいかなければならないが、「はだしっ子」の活動は、今後も元気な親子がより元気になってもらう取り組みを行っていくことが理想と考える。自分たちはどんな親子を対象に活動するかを明確にし、これからも豊かな自然環境を利用したJAならではの取り組みを、自信を持って続けて欲しい。

また、入園や入学で「はだしっ子」を卒業していった子どもたちとのつながりを大切にし、年齢の枠を超えた「芋ほり」などの農業体験を継続的に行っていくことで、農業に対する子どもや親たちの意識が高まるのが予見でき、今後期待されるところが大きい。

一方、この事業の後につくられた行政の子育て支援施設は、設備としても取り組み方としても工夫の余地があり、今後は何らかの交流をしながらこの地域全体の子育て支援の取り組みが向上するために力をあわせることが必要であろう。

資料

(1) 平成21年度 地域子育て支援拠点事業
「ひろば型」実施状況



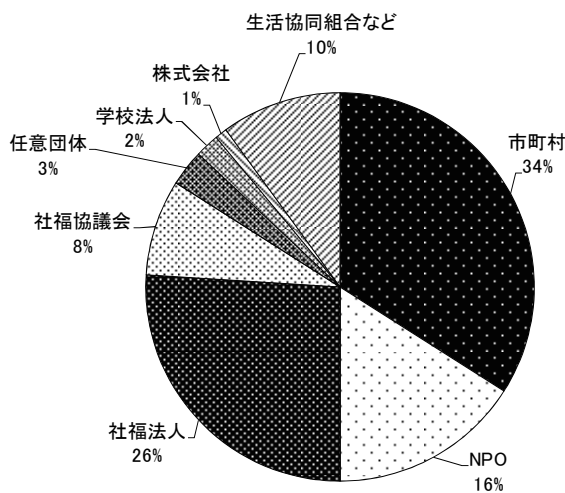
厚生労働省HPより抜粋

<http://www.mhlw.go.jp/bunya/kodomo/kosodate.html>

参考文献

- ・『日本の農村福祉』田端光美 勁草書房
- ・『日本の幼稚園』幼児教育の歴史 上 笙一郎・山崎朋子 ちくま学芸文庫
- ・『北つくば子育て支援「はだしっ子」』視察資料 J A北つくば子育て支援センター
- ・『2010 J A北つくばの現況』J A北つくば農業協同組合
- ・『J A子育て支援関連報告書活動報告書』平成22年 3月 全国農業協同組合中央会
- ・『いま J Aの存在価値を考える「農協批判」を問う』北川太一 家の光協会
- ・『総合農協統計表』1967年～2008年 農林水産省
- ・『子ども支援学研究の視座』安部芳絵 学文社
- ・『子ども計画ハンドブック 子どもの権利研究第14号』子どもの権利条約総合研究所 日本評論社

(2) 平成21年度 地域子育て拠点事業
「ひろば型」運営主体別実施状況



厚生労働省HPより筆者作成

<http://www.mhlw.go.jp/bunya/kodomo/kosodate.html>